

1 研究主題

「確かな学力」をはぐくむ学習指導 － ICT活用と言語活動を通じた授業改善－

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような状況において、「確かな学力」「健やかな体」「豊かな心」の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっている。

また、教育の情報化については、既に臨時教育審議会第一次答申においてその重要性が指摘されており、特に同審議会二次答申では、情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質が、読み、書き、算盤に並ぶ基礎・基本と位置付けられた。平成20年1月の中央教育審議会答申においても、「社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項」として、情報教育の重要性とともに、ICT環境に関する条件整備の必要性が指摘されている。

(2) 教育の動向から

平成15年の学習指導要領の一部改正以後、「生きる力」とは「確かな学力」「健やかな体」「豊かな心」の三つの部分からなるものとされた。さらに、今回の改訂では、教育基本法の改正等で明確になった教育理念を踏まえ、「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力など」と明確に定義された。

新学習指導要領第1章総則には、各学校において、生徒に「生きる力」をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならないということが記述された。その際に、生徒の発達の段階を考慮しながら生徒の言語活動を充実させるとともに、家庭との連携を図りながら、生徒の学習習慣が確立するように配慮しなければならないと記されている。つまり、「確かな学力」を育成するために、生徒の言語活動を充実させるように配慮することが求められている。

また、新学習指導要領総則編では、「各教科等の指導に当たっては、生徒が情報モラルを身に付け、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を適切かつ主体的、積極的に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。」が示され、確かな学力の育成に向けて、各教科の授業にICTを効果的に活用することが求められている。

(3) 本校の教育目標との関連から

本校の学校教育目標は、「心身ともに健康で、豊かな心と確かな学力を身に付け、たくましく生き抜く力を備えた生徒を育成する」である。学校教育目標として掲げている「心身ともに健康な生徒」「豊かな心と

確かな学力を身に付けた生徒」「たくましく生き抜く力を備えた生徒」、これらはいわゆる「生きる力」を身に付けた生徒の姿である。

このような生徒を育成するために本年度の努力点として、確かな学力をはぐくむ学習指導の充実、その方策として、基礎的・基本的内容の確実な定着と分かる授業の工夫改善に努めることとしている。このような、本校の教育目標を達成するためにも、「確かな学力」の育成が必要であると考えた。

(4) 生徒の実態から

平成22年度の「基礎・基本」定着度調査の結果を見ると、全体的には市全体の平均をやや上回っている。その中で、国語科においては、「読むこと」の文学的文章の通過率が低く、理科では、科学的思考力を問う問題の通過率が低い。数学科においては、3年生では資料の活用の領域がやや低く、2年では関数の領域の通過率が低く、観点別では、「数学的な見方や考え方」が低い。外国語科英語では、「書くこと」の通過率が低い。また、すべての教科で学年が上がるごとに無答率が増えている。

以上のことから、全体的には市全体の平均をやや上回っているものの、学年・教科によって落ち込んでいる分野や領域があり、まだ「確かな学力」が十分に身に付いているとは言えない。そのため、指導法の改善が強く望まれるところである。

(5) まとめ

このような社会の要請や教育の動向及び本校の学校教育目標や生徒の実態から、本年度は、ICT活用と言語活動を通じた授業改善を重点的に行うことで、「確かな学力」をはぐくむ学習指導につなげていきたいと考えた。そこで、研究主題を1年次から引き続き、『『確かな学力』をはぐくむ学習指導』とし、本年度の研究の重点である副主題を「ICT活用と言語活動を通じた授業改善」と設定した。それは、これまで各教科の授業の中で行われてきた様々なICT活用や言語活動を見直し、改善を図りながら、生徒に「確かな学力」を身に付けていくことをねらいとしている。

3 研究の流れ

(1) 1年次の研究の取組と成果及び課題

本校では、平成22年度から研究主題を『『確かな学力』をはぐくむ学習指導』と設定し、研究・実践を行っている。また、研究1年次である平成22年度の副主題を、「言語活動を通して基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る工夫」として各教科における「確かな学力」を明確にした上で、「学習意欲を高めるための手だての工夫」と「言語活動の適切な位置付けとその工夫」についての研究を進めてきた。そして、各教科においてこれまで取り組んできた言語活動の見直し、改善を図りながら、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る取組を行ってきた。昨年度の研究・実践を通して明らかになった成果と課題については、次の点が挙げられる。(○：成果、●：課題)

- 各教科において「確かな学力」を明らかにすることで、これからの目指す方向性が明確になった。
- 学習習慣づくりのための「学習の七か条」を、生徒だけでなく教師も意識して授業に臨むことで授業に適度な緊張感が生まれ、学習の習慣が授業を通じて確立されつつある。
- 有効的な言語活動を探ることで、全教科において言語活動の在り方を考えるきっかけとなり、これまで行ってきた授業を見直すことにつながった。また、言語活動を各教科の指導計画に適切に位置付けることで、学習活動に工夫・改善が見られ、読書活動の推進や図書室の積極的な活用など言語環境の整備にも生かされた。
- 授業を通じて学習習慣を確立させた上で、自宅での予習・復習を含めた家庭学習の習慣化から学習意欲の向上を図っていく必要がある。
- 生徒の変容を確かめながら、個に応じた指導や少人数指導・習熟度別指導を更に充実させていくことで、個人レベルでの学習意欲の向上を目指し、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る必要がある。
- 今年度研究・実践を行った言語活動の有効性を検証した上で、更に効果的な言語活動を追究していき、思考力・判断力・表現力を高める学習指導の在り方を考えていく必要がある。

(2) 研究計画の見直し

先に述べたように、昨年度（平成22年度）の研究の中で、生徒の学習意欲を高め、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るための言語活動の充実に取り組んできた。その中で、各教科において言語活動を取り入れる際に、ICTの活用を意図的に行っていくことで生徒の授業に対する学習意欲や集中力が増して、生徒の内容理解に大きな効果が期待できることが分かった。そこで、現在の生徒の実態等も考慮して、本年度の研究の中にICTの積極的な活用を通じた研究を取り入れていくことにした。

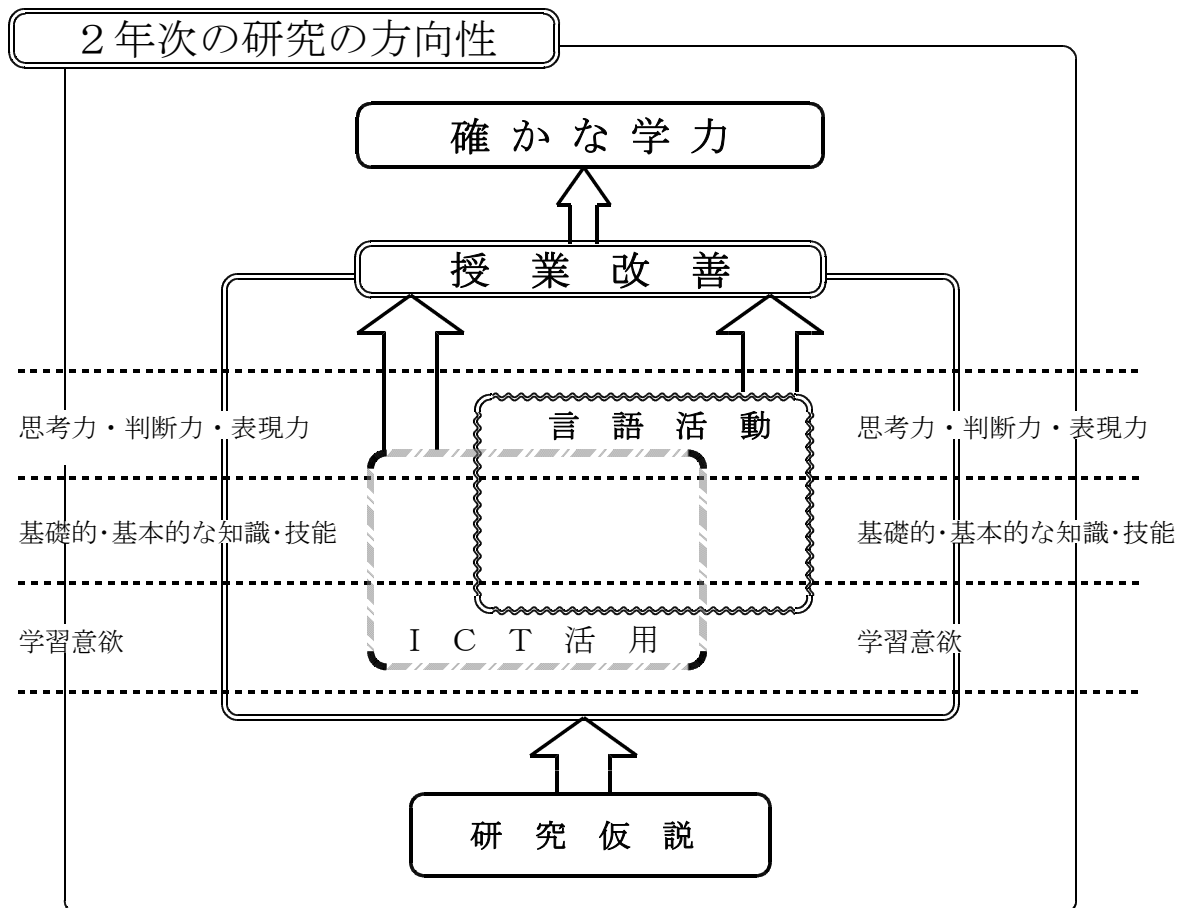
(3) 副主題設定の理由

本年度の研究の副主題は、「ICT活用と言語活動を通じた授業改善」としている。先に述べたように、「確かな学力」をはぐくむために、ICT活用を取り入れていくことで、生徒の学習意欲を高め、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図ることができるのではないかと考えた。また、ペアやグループ等の学習形態を工夫しながら、ICTを活用するなどしてお互いの意見や感想などを伝え合ったり、発表し合ったりするなどの言語活動の充実を一層図ることで、生徒が身に付けた知識・技能を活用しながら、思考力・判断力・表現力の向上につながるのではないかと考え、この副主題を設定した。

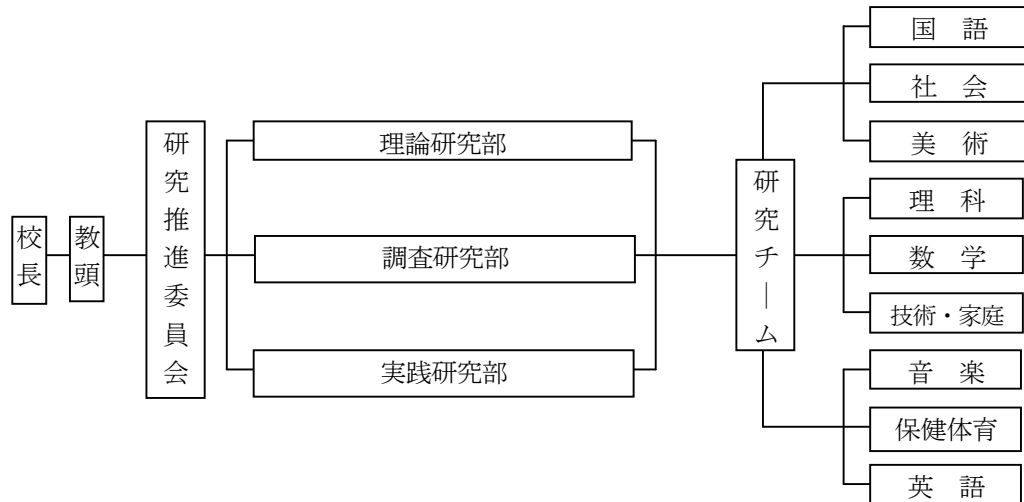
4 研究計画

(1) 研究の構想

2年次の研究の方向性は、下の図に示したとおりである。1年次の研究を踏襲し、ICT活用と言語活動を重点として授業の改善に取り組むことにより、研究主題に迫っていくことにする。特に、学習指導過程においては、ICT活用と言語活動を切り離して考えることなく、両者の特性を活かしながら相互補完していく指導法を探ることとした。



(2) 研究組織

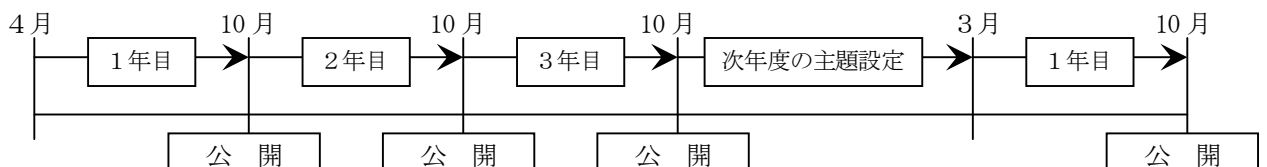


(3) 研究推進計画

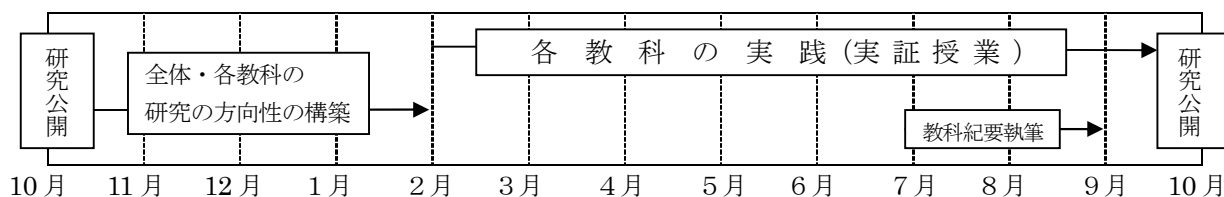
ア 各研究部等の主な活動

	主な活動	推進内容
研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究の全体計画の作成 ○ 研究の年間計画立案と研究の効率化 ○ 各研究部との連絡・調整と研究体制の確立 ○ 共同研究の推進と研究の総括 ○ 研究推進上の問題点の把握と対応策 ○ 関係機関との連絡・調整 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 適宜研究計画を提示し、計画的な研究ができるように努める。 ・ 各部の連絡調整に努める。 ・ 定期的な全体研修を企画し、相互に研究の進め方や研究の方向性を確認し、共通理解を図る。 ・ 研究推進上の問題点の把握を迅速に行い、その対応策を考え、研究の円滑化を図る。 ・ 県総合教育センターや市教育委員会との連絡・調整を図る。
理論研究部	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究の基本理論の構築 ○ 研究紀要（全体緒論）の作成 ○ 各研究部、各教科との研究の連絡・調整 	<ul style="list-style-type: none"> ・ テーマに関する基本的な考え方や各教科に共通する基本理論を構築する。 ・ 緒論の執筆と教科紀要の執筆要領を示す。 ・ 研究内容、研究の方向性についての共通理解を深めていく。
調査研究部	<ul style="list-style-type: none"> ○ 調査内容（アンケート）の検討・分析 ○ 実態把握に必要な諸資料の収集・分析 ○ 実践データの累積とその活用の推進 ○ 参考文献の紹介と文献研究の促進 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 調査内容の項目を整理し、決定する。 ・ 諸調査・検査の実施とその分析・考察を行い、効果的な利用法を研究する。 ・ 参考となる資料の検索を行い、文献研究の効率化を図る。
実践研究部	<ul style="list-style-type: none"> ○ ベース授業の提案 ○ 授業改善の研究 ○ 研究授業、授業研究の推進・運営 ○ ワークショップ型授業研究の研修・企画 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導方法・指導技術（ICT活用を含む）の研究を行う。 ・ 検証方法の研究・提示を行う。 ・ 研究授業、授業研究の具体的な方法を探る。

イ 3年計画の研究の場合のおおまかな流れ



ウ 研究公開から次年度の研究公開までの流れ



(4) 年間研究計画

日時	項目	内容
11月15日	【職員研修】 研究公開の反省と今後の取組	○ 研究公開についての職員アンケート・参加者アンケートを基に、今後の方向性も含めた研究計画について話し合う。
11月29日	【職員研修】 今後の研究計画について	○ 研究組織の提示・研究の方向性についての検討を行う。
12月下旬	研究の方向性の決定	○ 理論研究部で研究の方向性を決め、全職員で共通理解を図る。
1月	《研究部会》	○ 各研究部の方向性や今後の計画を決める。 1月14日・19日…研究部会
1月24日	【職員研修】 今後の研究について	○ 各研究部の進捗状況を確認する。 ○ 実態調査の結果を基に、今後の研究の方向性を確認する。
1月～2月	各教科の研究の方向性の決定	○ 各教科で研究の方向性を決める。センターの先生方の意見をもらいながら決めていく。1月7日・27日…教科部会 2月7日…教科研究案発表
2月2日	【職員研修】 ICTの在り方	○ 教育センターより講師を招聘し、各教科における具体的なICT活用の在り方を知る。
2月～	各教科の実践	○ 各教科で研究の方向性に基づいた実践を行い、検証を行う。
2月18日	研究提携校 事務連絡会	○ 研究提携の在り方や2年次の研究について連絡・調整を行う。
4月19日	【職員研修】 研究に関する共通理解	○ 研究推進委員会の組織、全体緒論の方向性、今後の研究計画、研究冊子の構成、研究公開の持ち方、ベース授業についての共通理解を図るとともに、教科部会を開き、研究の方向性を確認する。
4月25日	【職員研修】 ベース授業	○ 教育センターとの連携の在り方、指導案形式、授業記録の方法、検証方法など実証授業の在り方を確認する。実施教科は、ローテーションで全教科実施する。(本年度は理科：研究チームでサポート…数学・技家)
	研究提携校 事務連絡会	○ 本年度の研究提携の在り方について連絡・調整を行う。
5月31日	【職員研修】 教科研究中間発表	○ 各教科、研究の方向性に基づいて、授業の中でどのような実践を行っているのかなどを発表し合う。
6月21日	【職員研修】 紀要執筆計画・公開指導案形式検討	○ 研究紀要のまとめ方と公開指導案の形式を検討し、改善すべきところをあげ、共通理解する。
7月～9月	公開授業の指導案と紀要の執筆	○ 県総合教育センターの職員と打ち合わせをしながら、公開当日の公開授業の準備と指導案作成を行う。また、これまでの各教科の取組をまとめた研究紀要(論文)を執筆する。
9月6日	【職員研修】 公開授業構想発表	○ 研究公開当日に行う授業を、指導案をもとにして発表し、意見を出し合う。
10月3日	【職員研修】 全体 発表リハーサル	○ 研究公開当日の研究発表のリハーサルを行う。言葉遣いのチェックやプレゼンテーションソフトとのタイミングなどをみて、検討する。
10月12日	【職員研修】 教科研究 発表リハーサル	○ 教科紀要を基に、各分科会での発表内容を全体で検討する。
10月中旬	事前授業	○ 公開授業で行う授業と同じ内容を、別のクラスで実際に行い、課題を検討する。
10月28日	研究公開	○ 全体会・公開授業・分科会・講演会

5 研究仮説

教育の動向、生徒の実態等を考慮しながら、2年次の研究の方向性を基に、次のような研究仮説を立て、研究・実践を進めていくことにした。

<p>各教科の学習指導過程において</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学習意欲の向上と内容理解の促進を図るICT活用の工夫 ○ 思考力・判断力・表現力等を高める言語活動の工夫 <p>を行えば、「確かな学力」をはぐくむことができるのではないか。</p>

6 研究の重点

(1) ICT活用について

ICTを活用する際には、各教科の学習指導過程において、どの場面でどのように活用すれば効果的かを十分に検討する必要がある。そこで、まず、教師と生徒によるICTの活用の視点を図3のように整理した。これらを基に、各教科で具体的活用例とその期待できる効果を明確にした。授業の実際には、各教科の特質や指導内容、生徒の実態を踏まえながら活用場面を考え、具体的活用例に準じながら活用していく。また、ICT活用を意図的・計画的に行っていくために、一単位時間だけでなく単元指導計画にもその視点を位置付けることにした。

研究の構想でも述べたように、ICTを活用して、生徒の作品やアイデアを発表させたり、二つ以上のものを映して比較しながら説明させたりするなど、言語活動と切り離して考えることなく、両者の特性を活かしながら相互補完していく指導法の工夫を行っていくことにした。

教師	<ul style="list-style-type: none"> ○ 写真や実物、考え方を示す。 ○ 小さなものを大きく映す。 ○ 生徒の手元にないものを示す。 ○ やり方のモデルを示す。 ○ 生徒の作品やアイデアを発表させる。 ○ 映したものに書き込む。 ○ 活動の段取りを示す。 ○ 生徒の作品やアイデアを示す。 ○ 習熟のために繰り返し示す。 ○ 二つ以上のものを映して比較する。
生徒	<ul style="list-style-type: none"> ○ 写真や実物を基に、自分やグループの考えを発表する。 ○ 小さなものを大きく映して説明する。 ○ 自分の手元にないものを見る。 ○ やり方のモデルを実演・確認する。 ○ 作品やアイデアを発表する。 ○ 映したものに書き込む。 ○ 活動の段取りを示す。 ○ 習熟のために繰り返し示す。 ○ 二つ以上のものを映して比較する。 ○ テレビ会議等で対話しながら活動する。

図3 「ICT活用の視点」の整理

(2) 言語活動について

言語活動の充実は、各教科の目標達成に有効に働いたり、思考力・判断力・表現力の育成につながったりする。その実現には、「活動あって学びなし」ではなく、「学びのために活動あり」という認識の下、言語活動を捉える必要がある。そこで、各教科において、これまで取り組んできた言語活動を見直し、新学習指導要領を受けて重視すべきことを踏まえながら、言語活動を捉え直すことにした。

平成20年1月の中教審答申では、思考力・判断力・表現力等をはぐくむために、次のような活動を行うことが重要であると提言している。

<ol style="list-style-type: none"> ① 体験から感じ取ったことを表現する。 ② 事実を正確に理解し伝達する。 ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。 ④ 情報を分析・評価し、論述する。 ⑤ 課題について、構想を立てて実践し、評価・改善する。 ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。
--

これらを各教科の特質や生徒の実態に応じて具体化し、導入・展開・終末の各段階のねらいに沿って言語活動の位置付けを行うことにした。また、言語活動を意図的・計画的に行っていくために、単元指導計画にもその視点を位置付けることにした。

7 各研究部の実践

(1) 理論研究部

ア 研究紀要の形式の見直しについて

1年次は、緒論と教科論の2部形式で構成し、学校全体としての研究主題や研究仮説を踏まえながら、各教科で研究主題や研究仮説を設定し、研究実践に取り組んできた。2年次から、図4のように、各教科の実践を本論の中に入れ込む1部形式に見直した。そうすることで、研究仮説が全体で一つになり、全教科共通の仮説の下、教科の特性を生かした仮説実証の具体的な手立てをとって、検証に取り組むことができた。

執筆については、部員全員に役割分担し、研究部会や研究推進委員会で整合性についての検討を重ねてきた。

(1年次)	(2年次)
I 緒論	1 研究主題
1 研究主題	2 主題設定の理由
2 研究主題について	3 研究の流れ
.....	4 研究計画
II 各教科の実践	5 研究仮説
1 国語科	6 研究の重点
2 社会科	7 各研究部の実践
3 数学科	8 各教科の実践
4 理科	9 研究のまとめ
.....	

図4 研究紀要の形式の見直し

イ 「確かな学力」を身に付けている生徒の姿の捉え直し

本校の「確かな学力」の定義を踏まえて、「確かな学力」を身に付けている生徒の姿を、平成23年度3月に発表された県総合教育センターの研究紀要を参考に以下のように明らかにした。

基礎・基本を確実に身に付け、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を身に付けた生徒

各教科においても、具体的にどのような力が「確かな学力」であるのか、それはどのような生徒の姿として表れてくればよいのかを再考してきた。

ウ ICT活用に関する資料の収集について

県総合教育センターの研究をはじめ、その他の先行研究についても参考資料を収集し、職員全員による情報の共有化を図ってきた。

(参考資料)

- ◎ ICT活用実践ガイド～すぐに使える！授業の中のICT～ : 文部科学省
- ◎ 児童・生徒の「分かった」を応援する～ICTガイドブック～(2009年)
: 東京都教職員研修センター
- ◎ 教育の情報化ビジョン～21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～(平成23年4月)
: 文部科学省
- ◎ 教育指導実践事例集(平成22年3月)
: 東京都教職員研修センター

エ 言語活動で活用した発表話型について

県総合教育センターの研究を参考にしながら、各教科における言語活動を捉え直し、学習のねらいに沿った適切な位置付けに取り組んだ。また、授業における発表話形を設定したり、読書活動の充実を図ったりするなど、言語環境の整備も行ってきた。図5は、今年度、本校で検討し作成した「思考・判断と表現をつなぐ発表」話型である。各教室の前の壁面に掲示してある。

- わたしは〇〇だと思います。それは、〇〇だからです。
- 〇〇さんの意見に付け加えると～
- 〇〇さんの意見に賛成（反対）です。
- AとBを比べて分かることは～ 【比較】
- 前に習った〇〇を使って考えると～ 【関係付け】
- ……ことは、例えば〇〇です。 【例示】
- 〇〇のことから、〇〇という規則性が見いだせます。 【規則性】
- 同じ点は〇〇で、違う点は〇〇です。 【相違・共通点】
- 意見は大きく三つに分けられると思います。 【分類】 など

図5 「思考・判断と表現をつなぐ発表」話型

オ 各種発表会について

全教科共通の仮説の下、教科の特性を生かした仮説実証の具体的な手立てをとって、検証に取り組んでいるかどうかを検討する場が必要である。そこで、次のような発表会を企画・実施し、意見を出し合いながら全職員で検討してきた。

(7) 教科研究案発表会

1月から2月にかけて、県総合教育センターの共同研究者と教科部で、教科研究の方向性を検討してきた。その研究の方向性について、図6のように教科研究案の形式に沿ってまとめ、発表し合う場を設定した。

(4) 教科紀要中間発表会

各教科の研究の方向性に基づいて、仮説実証の手立てがなされているかを検討するために、研究実践についての進捗状況や成果、課題などを発表し合う場を設定した。

(7) 公開授業構想発表会

各教科の研究の方向性に基づいて、公開授業の構想が練られているかどうかを検討するために、題材名や本時の授業設計上のポイントや見せ場について発表し合う場を設定した。

(2) 調査研究部

表1に示したように、教師に対して「授業に関するアンケート」を、生徒に対して「学習に関するアンケート」を定期的実施し、その分析を基に生徒や教師の意識の変容を見ることにした。図7は、アンケートの主な内容とその結果である。

時期	対象
11月	職員
2月	生徒（1年～3年）
4月	生徒（新1年生）
7月	職員
	生徒（1年～3年）

表1 アンケートの時期と対象

(様式) 平成22年度 ○○科 教科研究案 平成22年2月7日

1 研究主題 「確かな学力」をはくくむ学習指導
- ICT活用と言語活動を通じた授業改善 -

2 「確かな学力」を身に付けている生徒の姿

3 生徒の実態 上記を受けて、教科で育てたい生徒の姿

4 研究仮説 NRT、定期テスト、継続、実態アンケートより把握できる教科における生徒の実態（留意書まで、3～4つでも可）

各教科の学習指導課程において

① 学習意欲の向上と内容理解の促進を促すICT活用の工夫
② 思考力・判断力・表現力を高める言語活動の工夫
を行えば、「確かな学力」をはくくむことができるのではないか。

5 これからの授業の中での実践

仮説実証のための具体的な手立て	仮説の検証方法
① 学習意欲の向上と内容理解の促進を促すICT活用の工夫	
ア	ア:
イ	イ:
② 思考力・判断力・表現力を高める言語活動の工夫	
ア	ア:
イ	イ:

6 研究実践計画

1月 7日	教科部会	教科研究案について
1月 27日	教科部会	教科研究案・実証授業について
2月 7日	職員研修	教科研究案発表会
2月 〇日	実証授業①	仮説の検証
2月 18日	センター事務連絡会	研究実践の計画案

図6 教科研究案の形式

生徒用	① あなたは、毎日の授業に興味や関心をもって参加していますか？											
	② あなたは、毎日の授業で教わる内容を理解できていますか？											
	③ あなたは、「ICT」を使った授業のときに、興味や関心がわきましたか？											
	④ あなたは、「ICT」を使った授業のときに、学習の内容を理解できましたか？											
	⑤ あなたは、グループやペアで意見を出し合う授業で、興味や関心がわきましたか？											
	⑥ あなたは、グループやペアで意見を出し合う授業で、学習の内容を理解できましたか？											
	⑦ あなたは、課題や目標に対して、自分の考えを整理し、まとめることができますか？											
	⑧ あなたは、自分の考えを友人や先生に分かりやすく伝えることができますか？											
		2・4月					7月					
			肯定④	やや肯定③	やや否定②	否定①	平均		肯定④	やや肯定③	やや否定②	否定①
	質問①	24	162	58	13	2.7	39	170	42	6	3.0	
	質問②	35	175	38	9	2.8	27	174	40	5	2.9	
	質問③	70	125	54	8	3.0	69	146	38	3	3.1	
	質問④	73	134	48	3	3.0	55	162	35	5	3.0	
	質問⑤	53	126	65	14	2.9	54	149	44	9	3.0	
	質問⑥	62	153	34	9	3.0	51	165	34	7	3.0	
	質問⑦	19	127	94	17	2.5	16	145	85	9	2.7	
	質問⑧	15	90	123	30	2.3	14	114	108	21	2.5	
教師用	① あなたは、授業で「ICT」をどの程度活用していますか？											
	② あなたは、生徒に「ICT」をどの程度活用させていますか？											
	③ あなたは、授業で「グループやペアで意見や考えを出し合う授業」をどの程度行っていますか？											
	④ あなたは、授業で「課題や目標に対して、生徒自らが考えを整理し、まとめるさせる活動」をどの程度行っていますか？											
	⑤ あなたは、授業で「生徒自身の考えを友人や先生に分かりやすく伝えさせる授業」をどの程度行っていますか？											
		4月					7月					
		70%	50%	30%	10%	0%		70%	50%	30%	10%	0%
	質問①	4	1	2	8	3	8	9	2	1	0	
	質問②	0	0	0	2	16	1	2	5	10	2	
	質問③	3	5	8	2	0	7	9	4	0	0	
	質問④	2	6	4	5	0	7	8	5	0	0	
	質問⑤	1	4	8	3	0	2	14	4	0	0	

図7 アンケートの主な内容とその結果

(3) 実践研究部

研究主題に基づいて各教科が足並みのそろった実践研究を行うためには、全ての教科が同じ条件で実践研究を行うことができる環境を整えることが必要である。そこで、実践研究部では、次のようなことを中心に研究を進めることにした。

- ① ICT活用に着目し、各教科がICTを活用できる環境を整えること
- ② 研究の仮説を実証するための「実証授業」において、各教科がどのような手順と方法で実証授業を行えばよいかを示すこと

ア ICT活用に関する機器の整備等について

本年度の研究テーマの中に含まれる「ICT活用」については、全ての教科で同じ条件の基でICTを活用することができる環境を整えることが重要であると考えた。そこで、2年次の研究から以下のような活動を行い、各教科で積極的にICTを活用できるようにするための環境整備に取り組んできた。

時 期	内 容
11月8日	○ 実践研究部会の中で、ICTとは何かという定義の確認を行う。
12月6日	○ 実践研究部会の中でICTを活用する際の問題点を挙げる。 ・ インターネットがどの教室で使用でき、どの教室で使用できないかを調査する。 ・ 普通のテレビを電子黒板として使えないかということで、市教委に相談する。 ・ スマートフォンを、教育活動の中で使用できないか検討する。 ・ 各教科で、ICTの活用事例をまとめることを決定する。
1月19日	○ 実践研究部会でICT活用の利点・欠点をまとめる。
1月21日	○ ICT支援による研修（ワイヤレスペンタブレット）を行う。
2月2日	○ 県総合教育センターから講師を招聘し、各教科のICT活用の事例を紹介してもらう。
2月9日	○ ワイヤレスペンタブレットを、社会・理科・数学で試行開始する。 ・ ワイヤレスペンタブレットを4月に10台購入することを決定する。
2月10日	○ 4月から各学級に「デジタルテレビ」「書画カメラ」「ワイヤレスペンタブレット」「パソコン」、更に特別教室に「プロジェクター」「書画カメラ」「パソコン」の設置を決定する。
2月14日	○ ICT活用指導力のチェックリストの研修を行う。
2月21日	○ 教育センターやICT先進研究校のICT活用事例の研修を行う。
3月2日	○ ICT環境の整備をスタートする。
3月11日	○ テレビ会議システムの授業での活用についての検討を行う。
3月17日	○ テレビ会議システムの試験運用を行う。
3月18日	○ ICTの教室環境（4種類のパソコンの機能について）を再検討する。
3月22日	○ 各教科で使用できるデジタルコンテンツやネット教材についての研修を行う。
3月25日	○ アクセスポイントを設置し、全ての教室でインターネットの使用が可能になる。
4月4日	○ ICT環境で不足しているものを購入する。（スピーカー・タブレット・プロジェクター・書画カメラを購入）
4月12日	○ ICTの教室環境の整備を完了する。
4月25日	○ ICTの教室環境の調査を行う。（5月1日～）
5月25日	○ 手書きソフトとワイヤレスペンタブレットの研修を行う。
5月30日	○ 情報コンテンツ制作ソフトの研修を行う。
6月1日	○ 鹿児島大学の園屋高志教授による研修「ICT活用と言語活動を組み合わせた指導について」を行う。
6月9日	○ ICT環境の最終チェックを行う。
6月13日	○ 情報コンテンツ制作ソフトの活用を開始する。

イ 実証授業について

実証授業とは、本校で定めた研究主題を達成するために、仮説に基づいて考案した具体的な手立てを取り入れ、それが効果的であるかどうかを検証するために行う授業である。研究主題に基づいた実践研究を行う上で、実証授業の記録方法や検証方法について、足並みをそろえることは大切である。そこで、実践研究部では、各教科が実証授業をしやすい環境を整えるために、以下のような活動を行ってきた。

(7) 実証授業の学習指導案形式の検討

実証授業の目的は、教科の特性を生かした仮説実証の具体的な手立てが効果的であるかどうかを検証することである。そのため、学習指導案は、各教科がどのような手立てを、どの場面で行っているか、また、その手立てが効果的であったかどうかを、どのような方法で検証していくのかを明記した形式にする必要がある。

そこで、上で述べたようなことを踏まえながら検討を重ね、全職員で形式についての共通理解を図った。図8は、3月地点での実証授業の学習指導案形式である。実証授業を行っていく中で、幾度か修正を行ってきた。

さらに、年度当初にその学習指導案形式に沿った学習指導案を使用して、代表の教科部で研究授業を行っている。これを本校ではベース授業と呼んでいる。このベース授業を全職員、共同研究者である県総合教育センターの所員と共に参観し、授業研究することで、各教科で実際にどのような方法で実証授業を行っていけばよいのかを共通理解している。

図9は、ベース授業の授業研究会の様子である。

(4) 授業の記録方法についての検討

仮説の検証を行うためには、授業の中に表れる生徒のわずかな表情などを見逃さないようにする必要がある。

そこで、抽出した生徒の授業記録をとるための記録用紙を作成し、全ての実証授業で活用した。図10は、抽出生徒の活動記録用紙である。

実証授業を行う際には、授業者以外に数名の記録者が必要になる。しかし、各教科部だけでは、記録者までの人員をまかなうことができない。

そこで、先に示したように三つの研究チームに分かれ、そのチーム内で、実証授業に必要な記録を担当したり、実証授業に関するその他のサポートを行ったりするなど、授業者のバックアップ体制を整えている。

〇〇科実証授業指導案

活動場所 ○○○○○○○○
生徒数 ○年○組 計○名
指導者 教諭 ○○○○

1 単元名「○○○○○○」(題材名)
2 単元の指導計画

時間	指導の流れ
1	○ 文字を使って様々な事象をとらえさせる。
2	○ ×××××××××××××××××××× (本時)
3	○ 単元の評価で振り返らせる。

3 本時の実際 (○/○)
(1) 題材名
「○○○○○○○○○○○○○○○○」
(2) 学習目標
(3) 研究仮説に沿った授業設計の視点(例)
ア 授業の導入において、○○できるようにするために、○○を行う。
イ ○○○を取り入れ、○○できるようにするために、○○を行う。
(4) 授業の展開

過程	時間	形態	学習活動	指導上の留意点	仮説実証の視点
導入		1	学習目標 ○○○○○○○○○		
展開		2			
		3			
終末		4			

(5) 検証方法
生徒がどのように変容したのかを具体的に記し、生徒(成績上位・中位・下位)の反応を追跡調査することで検証する。

図8 実証授業の指導案形式



図9 ベース授業の授業研究会の様子

抽出生徒の活動記録 ()

抽出生徒の座席位置	抽出生徒について
(前)	<ul style="list-style-type: none"> 4月NRT中位 興味・関心が高く、基礎・基本は定着している。コミュニケーション能力あり、よく発表をする。
座	<ul style="list-style-type: none"> 前の人に手助けをした後、きちんと説明できた。
隣	<ul style="list-style-type: none"> 15-(5+7)=15-12、自分の考えをしっかりと説明できた。 友達と同じ考えにするとよかった。 「角の数が入っている」とつぶやいた。

図10 抽出生徒の活動記録用紙

9 研究のまとめ

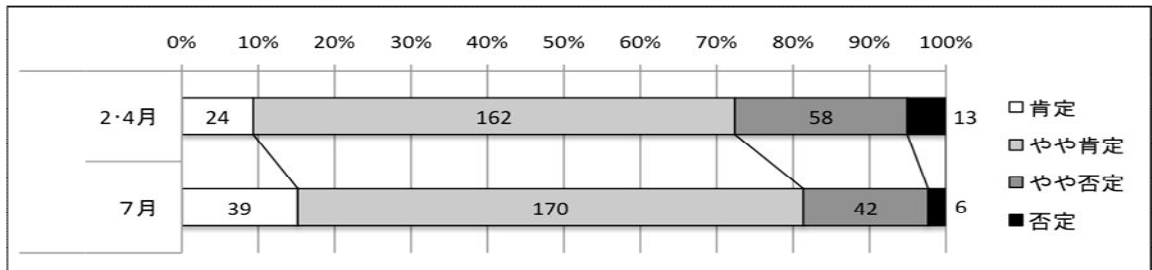
(1) 研究の考察

3年計画での本研究の1年次は、言語活動の充実を核とした研究を進めてきたが、2年次は研究の方向性を大きく見直し、従来の研究を、ICT活用の充実による授業改善を中心とした研究をしてきた。

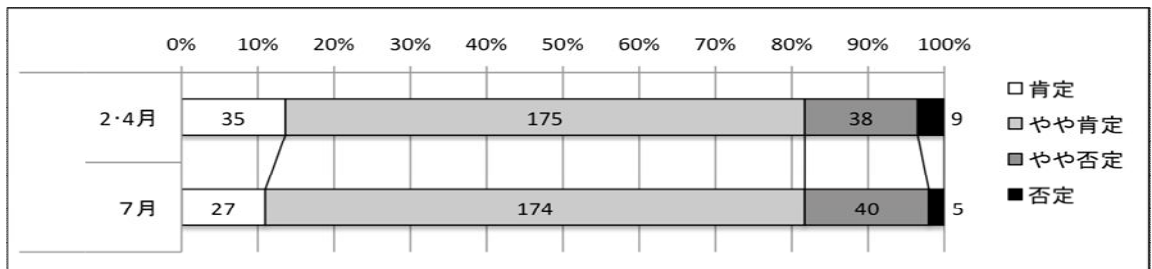
ICT環境が十分でない中で、その整備に苦慮しながらも、ICTを生徒の基礎的・基本的な知識・技能の定着、ひいては思考力・判断力・表現力等の育成に活用し、研究仮説の実証を図ってきたことは授業改善の大きな前進であった。

昨年度の2月に現2・3年生に、今年度4月に新1年生に実施した計257人のアンケート結果と7月に全校生徒257人に実施したアンケート結果を比較したものを、次に示す。

質問① あなたは、毎日の授業に興味や関心をもって参加していますか？



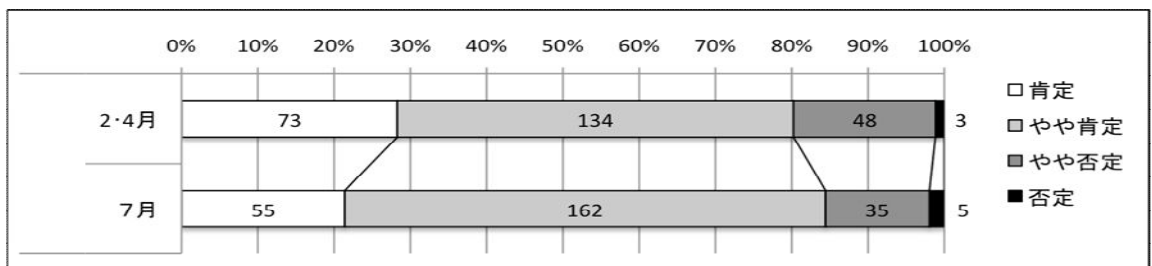
質問② あなたは、毎日の授業で教わる内容を理解できていますか？



質問③ あなたは、「ICT」を使った授業のときに、興味や関心がわきましたか？



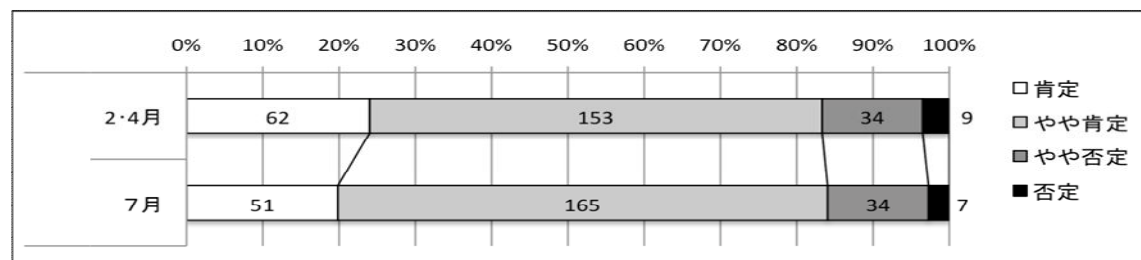
質問④ あなたは、「ICT」を使った授業のときに、学習の内容を理解できましたか？



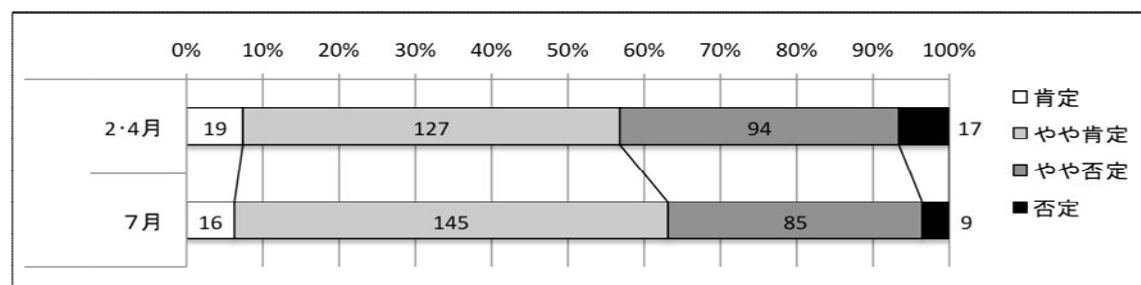
質問⑤ あなたは、グループやペアで意見を出し合う授業で、興味や関心がわきましたか？



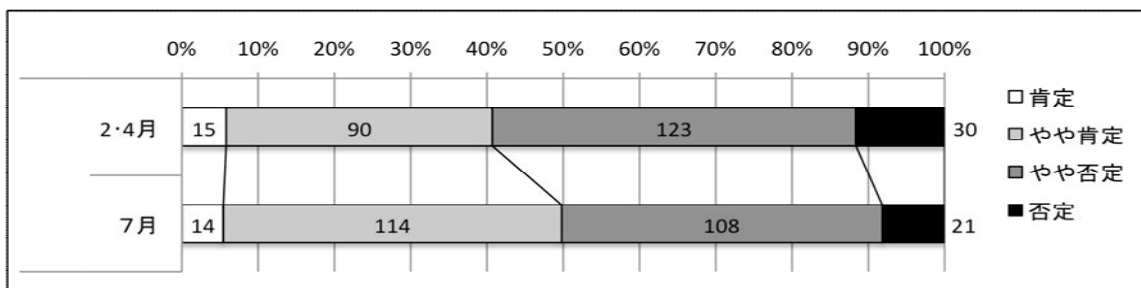
質問⑥ あなたは、グループやペアで意見を出し合う授業で、学習の内容を理解できましたか？



質問⑦ あなたは、課題や目標に対して、自分の考えを整理し、まとめることができますか？



質問⑧ あなたは、自分の考えを友人や先生に分かりやすく伝えることができますか？



以上の意識調査の結果から、すべての質問項目において、肯定的な答えが増加していることが分かる。8割以上の生徒が、毎日の授業や「ICT」を使った授業のときに興味や関心をもって参加し、内容を理解していると答えている。また、グループやペアで意見を出し合う授業でも、8割以上の生徒が、興味や関心がわき、学習の内容を理解していると答えている。その一方で、課題や目標に対して、自分の考えを整理し、まとめることができると答えた生徒が約6割、自分の考えを友人や先生に分かりやすく伝えることができると答えた生徒が約5割であった。いずれも、4月の調査と比べて増加はしているものの7割以下であった。

2年次の研究を再度振り返ってみると、ICT活用の工夫を行うことで興味や関心をもって授業に参加し、内容を理解することができた生徒が大幅に増えたことや各教科の考察から、学習意欲の向上と内容理解の促進が図れたと言える。

また、言語活動の工夫を行うことで、自分の考えを、整理しまとめたり、分かりやすく伝えたりすることができるようになった生徒が増えてきたが、未だに苦手意識をもつ生徒が多い状況にある。

各教科の考察からも、表現力の高まりに多くの課題を残していることが分かる。つまり、思考力・判断力・表現力等は高まりつつあり、現在の言語活動の工夫の方向性は正しいと言えるが、今後更なる工夫が必要である。

(2) 研究の成果

- 確かな学力をはぐくむ学習指導を目指して、日常的にICTを活用して授業を進める場面が多く見られるようになった。
- ICT活用の視点を明確にしたり、単元の指導計画に位置付けたりすることで、効果的なICT活用が意図的・計画的にできるようになり、生徒の学習意欲の向上や内容理解の促進につながった。
- 新学習指導要領にある重視すべきことを踏まえながら言語活動を捉え直し、ICTを意図的に活用するなど、指導方法の改善を行うことで、思考力・判断力・表現力等を高めるための授業づくりにつながった。
- 一単位時間において言語活動を学習のねらいに沿って適切に位置付けたり、単元指導計画に言語活動の視点を位置付けたりすることで、思考力・判断力・表現力等を高めるための活動として定着しつつある。

(3) 今後の課題

- 知識の定着や技能の習得のための生徒のICT活用を模索する必要がある。併せて、思考力・判断力・表現力を高める活用法についても研究を進めていかなければならない。
- 生徒がICTを学習のツールとして使いこなすために、ICTリテラシーを高める必要がある。そのために、来年度の教育課程を検討し、ICTの基本的な操作技能の習熟を図る時間を特設していくことも視野に入れていく必要がある。
- 授業の中で学習目標に沿った達成感を味わわせるような言語活動の工夫を研究するとともに、その実践を日常的に図っていく必要がある。
- 表現力を高めるために、思考力・判断力・表現力等を総合的に捉え、今後継続した授業改善を行っていく必要がある。
- 授業での言語活動の充実を図るために、短学活での1分間スピーチ、生徒集会・儀式的行事等での生徒の発表、昼食時の生徒による放送、朝のあいさつ運動など、学校の全教育活動の中で機会をとらえ、生徒の表現活動を意識的に取り込んで、側面から支援していく必要がある。

引用・参考文献

- 「中学校 学習指導要領解説 総則編」(平成20年9月):文部科学省
- 大杉昭英編 「中学校新学習指導要領の展開 総則編」(2008年11月):明治図書
- 「各教科等における『言語活動の充実』とは何か」
ーカリキュラム・マネジメントに位置付けたリテラシーの育成ー :三省堂
- 「学びを生かす生徒をはぐくむ学習指導」研究紀要 第38号~41号:吉田南中学校
- 教育の情報化ビジョン~21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して~(平成23年4月):文部科学省

